

2010年イスラエルでのメシアニックジューによるペンテコステ

2010年5月16日 アシェル・イントレーターとタール・ロビン

春に、ペサハ(過越の祭)、オメル(初穂の祭り)、そしてシャヴオット(七週の祭り)という3つの聖書で定められた祭りがあります。過越の祭として知られるペサハはエジプトからの脱出を、そしてイエシュア(イエス)の十字架を記念するものです。オメル、または麦束(注1)は春の最初の収穫とイエシュアの復活を記念するものです。シャヴオット(注2)は「週(複数形)」あるいはペンテコステと呼ばれ、収穫期の初穂と聖霊の注ぎを記念するものです。

注1:「オメル」は古代の度量衡で、1オメル=2.3リットルで、穀物を測る際に使われます。初穂の祭り「ヨム・ハ・ビクリーム」は別名「オメル」というのは、その日から七週の祭りまでの50日間、1オメルの穀物の束を祭司に持っていくという伝統があるためです。現在は神殿がないので、象徴的に毎日の「オメルを数える」あるいは「オメルの日を数え」ています。宗派によっては、パンを使うところもあるようです。(メシアニック・コングリゲーションも、場所によってやり方はまちまちです。)初穂の祭りの日は、ユダヤ教の宗派によって二通りの数え方があり、過越の祭りの二日目であるニサンの月16日に祝う宗派もあれば、ニサンの月15日に近接する安息日(金の日没から土の日没まで)を初穂の祭りとして祝っている宗派もあります。いずれにせよ、初穂の祭りは、七日間に及ぶ過越の祭りの真ん中に行われます。過越の祭りの直前に十字架に架かれ、三日後に甦ったキリストは、ちょうど「初穂の祭り」に復活したことと重なるため、メシアニックジューは、聖書の例祭として定められている「初穂の祭り」を、主の復活の日としてお祝いしています。(死者からの初穂、です。)

注2:シャヴオットはヘブライ語で「週(複数形)」です。七週の祭りのことを「シャヴオット」と言い、ギリシャ語に翻訳されて「ペンテコステ(50)」となりました。シャヴオットは初穂の祭りからちょうど50日目に行われます。

オメルとシャヴオットの間は通常「オメルを数える」期間と呼ばれています。聖書的により正確に言うならば、私たちは「オメルからシャヴオットまでの日を数える」のです(レビ記 23:15)。オメルの日はたった一つしかなく、そのオメル-麦束の日から数えることは、復活の重要性を強調するのです。

50日に渡って日を数えることは、聖霊の注ぎに対する期待を高めます。それはまるでミサイル発射まで「カウントダウン」するようなものです。イエシュアは弟子たちに、天から力を受けるまでエルサレムに留まりなさい(ルカ 24:49)、聖霊が彼らに臨む時(使徒 1:8)、あと数日で「聖霊による洗礼」を受けよう(使徒 1:5)と語りました。

彼らの期待は頂点に達していました。彼らがオメルから日を数えて、その聖霊の注ぎを受ける「大いなる日」がシャヴオットであることは彼らにとって明らかだったのです。神はオメルの日を数えることを、それによって信仰による注意を高め、聖霊を受ける準備を期待させることをご計画されていたのです。この時も今もそうです。

アハヴァット・イエシュア・コングリゲーションで今週私は聖霊を受けた弟子と癒しの力を受けた長血を患う女性(マルコ 5 章)について比較しました。彼女は癒しを受けるという信仰に期待することに焦点を当てました。私たちはエルサレムで起こる第二のペンテコステを、信仰を持って期待することに焦点を当てています。彼女は個人として、必死の信仰によってイエシュアに触れましたが、私たちはグループとしてそれと同じことをしたいのです。彼女は自分のために受けましたが、私たちは、「イスラエルはみな救われる(ローマ 11:26)」ために受けたいのです。

神はペンテコステに聖霊の力を与えました。いつかは「聖霊を人々から取り上げた」でしょうか。答えは「一度も取り上げてしまったことはない」です。聖霊の炎は使徒行伝の弟子たちが得られたように、現在の私たちも得られるものなのです。この霊的な力は物理的領域の炎、電気、または原子力と同じくらい現実的なものなのです。物理学の法則があるように、この霊的な力を支配する法則があります(ローマ 8:2、ヤコブ 3:6、ヘブル 6:5、7:16)。真の霊的な炎はイエシュアを通して神から来るもので、それは聖であること、神の御国の目的に向かうものなのです。

伝統的なユダヤ教にはまた、十戒はシャヴオットの時与えられたという伝承があります。出エジプト記 19 章のシナイ山に炎が降りてきたことと、使徒 2 章のシオン山に炎が降りてきたことに、驚くべき類似があります。

宗教的なユダヤ人はシャヴオットの日は一晩中十戒を学びます。この伝統は祈りながら一晩中起きているという伝統を反映するもので、それは、第二神殿時代までさかのぼります。それゆえシャヴオットの日、エルサレムの路上に正統派ユダヤ教徒が何千人もいる説明がつきます。徹夜の祈禱の後、彼ら(訳注:紀元1世紀のユダヤ人信者たちのこと)は聖霊を受ける準備が整ったのです。

聖霊は使徒行伝で5回、4、8、10、19 章において注がれました。使徒 2 章でシャヴオットの日、エルサレムにおいてメシアニックジューに、最初に聖霊と炎が注がれました。使徒 4 章では、場所と人々は同じでしたが、聖書的な聖なる日ではありませんでした。使徒 8 章では、時は異なり、場所も異なっていました。人々はサマリア人、一部ユダヤ人でしたが、ほとんどは受けていませんでした。使徒 10 章では、元々ヨーロッパ出身でしたがイスラエルに住んでいる異邦人に聖霊が下りました。使徒 19 章では、異邦人でしたが、出来事は完全にイスラエルの外で起こりました。

現在、聖霊はどの日であっても、どの場所であっても、イエシュアを信じる真の信者の共同体であれば誰でも受けることができます。しかし、最初に聖霊の炎が降った状況が再び繰り返されるという、その日はもうすぐやって来ると信じています。聖書の祭りに関連してエルサレムにいるメシアニックジューに聖霊の炎が再び降るでしょう。もしこの期待が諸国にいる世界中のクリスチャンと、パートナーシップを組み共有されるならば、ヨエルやシモン・ペテロ(使徒 2:17)が預言したように、偉大なるリバイバルが起こるでしょう。神の霊は主が再臨される大いなる恐るべき日に来る前に、「すべての肉にそそぐ」のです。